琉球大学学術リポジトリ

東南中国沿海地域における唐宋代の考古遺跡

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2016-01-15 キーワード (Ja): 環シナ海地域, 東南中国, 沿海地域, 唐代, 宋代 キーワード (En): 作成者: 後藤, 雅彦, Goto, Masahiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33090

東南中国沿海地域における唐宋代の考古遺跡

後　藤　雅　彦
Masahiko Goto

Archaeological Sites of Tang-Song Dynasties in Southeast China

キーワード：環シナ海地域、東南中国、沿海地域、唐代、宋代

はじめに

筆者は、東南中国沿海地域の地域間交流について先史時代に溯って検討を加えながら、先史東南中国の地域的特質の把握に努めている。拙稿（2004）では、こうした沿海地域間の交流を探るために澎湖群島の先史文化と周辺地域と関係について検討したことがあるが、これは澎湖群島内にある考古遺跡は、台湾海峡両岸の地域間交流を追求する上で重要な位置関係にあるばかりか、島嶼域における人々の多様な生活形態を示す点においても注目できることに他ならない。ところで、澎湖群島では先史時代から時間を隔てて、唐代から宋代の居住遺跡が調査されており、同時代の東南中国沿海側との比較検討を行うことによって台湾海峡両岸地域から南シナ海沿岸地域の地域間交流の特質を理解する上で重要であると考える。

そこで、本稿では唐宋代を中心に東南中国沿海地域における考古遺跡の調査研究状況を整理し（第1図）、同時代の環シナ海地域における海を媒介とした交流や生活技術の比較研究にあたっての考古学上の問題の所在を明らかにしたい。

ところで東南中国沿海側と言ってもその示す範囲も問題となろう。筆者自身、これまで現在の行政単位からすると福建省・広東省を中心とした地域を

第１図　関連地域と海壇島

東南中国の範囲としてきた。本稿では、とくに沿海側を扱う上で、さらに台湾海峡上の澎湖群島、あるいは海南島、南海諸島も触れることが必要となると考えた。これらの海域世界は一般的に東シナ海地域、南シナ海地域にまたがる地域と言える。こうした海からみた沿海側の視点とは別に内陸からみた沿海側の地域単位としては、河川水系が重要な意味をもつであろう。19世紀の王朝末期の地域を検討したスキナー氏（1989）は「伝統的に中国人によって行われていたような定着農業に適していた王朝の地域」を９つに分ける中、当該地域について、「南東沿岸」と「嶺南」に分けていることは注目される。すなわち、前者は武夷山から海に流れる多数の河川の流域、後者は西江、北江、東江を含む流域である。

考古学的に長江以南の沿海側の地域区分を行う上で、やはり福建以南の沿海側では福建省と広東省の境界が問題であり、『中国の考古学』（小澤・谷・西江 1999）でも、地理区分として東南沿海を北部と南部に区分している[1]。

１．研究状況と問題の所在

中国考古学において唐宋代以降の考古遺跡の調査研究は、都城遺跡、埋葬遺跡、生産遺跡を中心に実施されている。中国考古学の代表的な概説書である『新中国的考古発現和研究』（中国社会科学院考古研究所編 1984、『新中国の考古学』1988）の中でも「第６章　隋唐から明代」が設けられ、本稿が対象とする東南中国に該当する項目として、「1　隋唐・五代（2）唐代の墓の発掘と研究」の中で、広東地区の唐墓、福建地区の唐墓があげられている。また、「2　宋遼金元」でもやはり埋葬遺跡が中心であるが、宋代の考古学調査として磁器窯や製鉄遺跡などの手工業に関する遺跡の調査をあげている。また、泉州などの古船の調査研究に関しても整理している。

ところで、1996年に『東南考古研究』第１輯が発刊され、現在までに第３輯（2003）が刊行されている。東南中国の先史時代研究を学ぶ筆者にとって、

その内容は、中国での東南中国に関わる研究上の関心テーマ及び問題点を把握できるものとして有意義なものである。そして、重要な研究テーマとして、東南先史考古と印紋陶文化、東南陶磁考古、海外交通史跡などに関する分野があげられ、本稿に関わるテーマとしては第１輯に東南陶磁、第２輯（1999）に海洋考古と海交史跡があげられ、後者には福建定海沈船の報告（中澳聯合定海水下考古隊 1999）と関連研究論文が掲載されている[2)]。第３輯では東南研究として王静氏の海南島の墓葬に関する論考や秦慧穎氏の古代福建における動物崇拝の論考、さらに劉茂氏は香港深湾遺跡の灰窯に関して陶磁窯であることを検討するなど、その内容は多方面に及んでいる。なお、沈船に関しては、最近、『東南考古研究』の主編の一人である呉春明氏（2003）の著作が刊行されている。

また、地域考古学の進展として、広東省では1980年代の第２次分布調査の成果が『中国文物地図集　広東分冊』（広東省文化庁編 1989）として刊行され、広東省内の考古遺跡の分布状況が把握することができる。唐代以降では、やはり墓葬や窯址遺跡が中心ではあるが、居住遺跡などの遺跡がみられ、沿海地域として港湾遺跡、古船遺跡や製塩関連遺跡なども含まれることは注意したい。

さらに地域を絞ると、香港における考古編年として、鄧聰氏（1994）は層位学と型式学的研究によって香港地区を11の時期に区分している。すなわち東湾Ｉ期文化（約6000年前）→東湾文化（約5500年前）→大湾彩陶盤時期文化（約5000年前）→白芒第４文化層（約4000～3500年前）→白芒第３文化層（西周～戦国時代）→白芒第２文化層（前漢）→李鄭屋漢墓（後漢）→白芒西晋墓葬（西晋）→深湾隋代墓葬（隋）→白芒第１文化層（唐）→妹湾仔文化層（宋）である。最近の調査でも香港元朗輞井圍鶴洲嶺遺跡では宋代の建築址や明末清初の貝層を含む包含層と建築址が確認されている（香港考古学会他 2001）。

また珠海市においても、分布調査が進展する中、唐代以降の居住遺跡５遺

跡が確認され、平瓦、丸瓦などの建築部材と陶磁器類が採集されているが、発掘調査は実施されていないようである（珠海市博物館他 1991 a）。また、珠海市は大小144の島々を含む多島域であるが、これらの島嶼域においても分布調査が実施されている（珠海市博物館他 1991 b）。各島の遺物採集地点の様相は異なり、各島の東北と西北砂浜あるいは岩礁域（砂浜を含む）において多くの遺物が採集され、北部の海岸がこれに続き、南部と東部の海岸は少ない。また採集遺物の多寡とその継続年代は各遺跡ごとに異なり、淇澳島牛婆湾、外伶停島石沖湾においては商代或いは戦国時代から明清時代まで継続するのに対し、高欄島宝湾鏡、大万山推船湾、小蜘洲島細沙湾、蚊洲島蚊洲湾などは少量の明代磁器や少量の宋、明代磁器のみ採集されている。風浪が小さく、停泊条件が良好で淡水の豊富な海湾に対し、条件の悪い海湾には短期間の停留の痕跡しか認められないと指摘されている。

また深圳における研究として楊耀林氏（1994）は宋元明清代墓葬出土品について紹介し、その生産窯について検討を加えると同時に、西沙群島などで出土している貿易陶磁器と比較検討を行い、深圳赤湾などの港湾が海外交通の船舶の停泊地であることから、海外への貿易陶磁器が当地にもたらされた結果として理解している。

いずれにしても、従来の研究では出土陶磁器類や銭貨が主に扱われており、遺跡にしても埋葬遺跡と生産遺跡では窯址が中心であった傾向は否定できない。居住、建築関連遺跡については、遺物に瓦が含まれることからその存在が確認されていても、遺構や生活用具を通じてその場における生活の実態に迫る資料が乏しい点が当該時期の考古学研究の現状であると言える。

一方、一地域内、とくに東南中国沿海側の島嶼域の分布調査によって、島嶼域という限定された空間内の遺跡分布が明らかにされている点などは注目される。そこで、本稿では海壇島、澎湖群島、海南省の３地域における考古調査を整理すると同時に、唐宋代の居住遺跡を中心に、出土遺物についても生活技術に関わる要素について検討を加えたい。

２．調査研究の事例

(1) 澎湖群島における調査事例

澎湖群島における宋代以降の考古研究は1945年に遡り、宋代陶磁器が確認され、それ以後も台湾大学を中心に調査が実施されている。その後、1983年に臧振華氏による澎湖群島の調査が開始され、全面的な遺跡踏査と発掘調査が実施されている。同調査では、澎湖群島に属する32の島嶼を対象に、91ヶ所（先史時代52ヶ所、歴史時代39ヶ所）の遺跡が踏査された（Tsang 1992)。

蒔板頭山Ａ遺跡は白沙島に所在する海浜地域に立地する（第３図上)。発掘面積は167.25㎡、層序関係は４層に細分される。下層から粗縄紋土器文化層、無紋赤色土器と灰黒色土器文化層、下部歴史層、上部歴史層である。２つの歴史層からは陶磁器類、鉄器、石器の他、貝殻、魚骨、獣骨などが出土しており、上部歴史層からは卵石と岩塊敷きの住居址が確認されている（第３図下)。出土遺物・遺構から上部歴史層は定着的な集落址であるのに対し、下部歴史層は臨時的な居住形態を示すと考えられている。その帰属年代は下部歴史層が唐宋代、上部歴史層は南宋より遅くない時期とされる。

内垵Ｃ遺跡は漁翁島の西海岸に所在する貝塚遺跡である。３層に区分されるが、上位２層は撹乱も受けているが、中国陶磁器類と鉄器、塼、瓦片の他、貝殻、魚骨、獣骨が出土している。下位層では土器（瓶類)、土錘と貝類が出土しており、やはり臨時的な居住形態を示す。その年代は唐末（９・10世紀）から宋代を過ぎることはない（11・12世紀）とされる。

水垵Ａ遺跡は望安島の北端海岸で、厚さ30cmの貝層が確認されている。陶磁器類と貝殻、魚骨が出土しており、長期的な居住形態を示さない。年代は９世紀か10世紀とされる。

これらの調査を踏まえて、臧振華氏（1989）は初期漢人の拓殖期として蒔板頭山期を設定し、その他の遺跡として白沙島の通梁、後寮遺跡、漁翁島の内垵Ｃ遺跡、中屯島の中屯Ａ、中屯Ｃ遺跡、澎湖本島の沙港Ｂ、中西Ａ遺跡、

第２図　澎湖群島の関連遺跡
（地図原図：Tsang 1992）

第３図　蒔板頭山Ａ遺跡
（原図：Tsang 1992）

望安島の水垵Ａ遺跡が含まれ（第２図）、宋元代の陶磁器或いはさらに早い中国陶磁、銭貨、その他の製品が出土している。前述したように蒔板頭山Ａ遺跡では層序関係から２時期に区分されるが、当該期として９（10）世紀～14世紀、すなわち唐代後期から元末明初に相当する。

そして臧氏は生業形態、集落形態、交易形態について言及している。すなわち、同時期の生業形態として蒔板頭山Ａ遺跡を例にし、海洋資源中心から海洋資源と農業、畜産業混合型に変化する過程を辿り、下部歴史層では貝層の堆積は薄く、浅水と潮間帯の魚類・貝類を主に採集しており、上部歴史層になると、魚・貝類の採集活動が主要であることは変わりないが、家畜（羊・豚・鶏）や農耕が考えられるとした。

集落形態については初期の臨時的に停留した場から、南宋以後、定着的な集落が形成されたという変遷を指摘した。交易形態を示す出土陶磁器類や鉄器は東南中国沿海側、とくに福建地区の産品であるが、初期の段階は数量も限られ、種類も少ないことから交易品ではなく、漁民の携帯品と考えている。その後、数量が増加するばかりか、種類も飲食、盛食、煮沸から建築、漁撈などの各種器物と用具が出土するが、これらも多くは在地産ではなく、東南中国沿海側から輸入されたものであることから、南宋代以降、澎湖群島と大陸側には何らかの商品貿易が行われていたと指摘した。

ここで上部歴史層出土の生産工具類について概観してみる（第４図）。土製品（1～17）には漁網錘（赤色土錘）が出土している。長さ3～5cm、幅2.5～3.5cm、重さ30～40ｇがほとんどである。鉄製品は釘類（20・21）、釣針（18）、刀類（19）などで、さらに石器では凹石（23）がみられる。なお、中国銭貨には、完形品として「元豊通宝」、「元祐通宝」が出土している。

澎湖群島出土の陶磁器について澎湖群島で使用されたものというよりも、南海貿易のルートとしてもたらされたという見解もあるようだが、こうした居住遺跡の調査から、澎湖群島において日常的に使用されたものと理解できる。

第４図：蒔板頭山Ａ遺跡出土遺物
（実測図出典：Tsang 1992　※以外縮尺 1/4）

また中屯遺跡の出土陶磁器を実見した関口広次氏（1983）は、「南宋時代に於ける福建地区の生活実体を示す資料となり、また陶磁器生産と消費地の具体的関係を提示する」とし、これらの一部が東南アジア諸地域や日本から発見されることから「中国国内に於ける極めて安価な日用雑品も輸入用品として十分通用していた」ことを指摘している。

(2) 海壇島における調査事例

平潭県は海壇島を中心に127の島嶼群によって構成されている。その中で、海壇島は福建省東部、閩江河口から南へ約50kmの台湾海峡西側に位置し、面積は245.7k㎡である。海岸平原を主とする地形に、弧状の低い丘が分布しており、島東北部の君山が島内最高峰で海抜約400mをはかる。

海壇島における考古調査としては、1992年に全島の分布調査が実施され、当該時期の遺跡が５ヶ所確認された（第１図）。まず、印紋陶が採集された商周時代の遺跡でもある井過関山遺跡は唐宋代の堆積層が厚さ20～50cm堆積しており、丸瓦、瓦当、陶磁器類が採集されている。

さらに、唐宋元明代の遺跡としては次の遺跡が調査されている。青峰遺跡は海岸低山南斜面の台地上の断面に厚さ20～50cmの文化層が確認され、丸瓦片、磁器片が確認された。唐～五代の建築遺跡である。東梧風遺跡は小山の台地に立地し、地表下30cmに文化層が確認され、平瓦片、磁器片が出土し、宋元代である。梧井遺跡は小山の地表下50cmに厚さ40cmの文化層が確認され、磁器片が出土している。堆積の状況から埋葬遺跡の可能性が指摘されている。宋末元初とされる。流水遺跡は海辺の台地、海抜10～15mに立地し、地表下10cmに50～100cmの文化層（貝層）が確認された。磁器片、瓦片の他に、土錘、石器が出土しており、集落遺跡である。石器は使用痕のある楕円形長条状河卵石で貝類の叩きに使用されたと考えられる。土錘は２点、１点は円柱状に「井」字形の溝が走り、もう１点は円筒形である。図版は掲載されていない。元末明初とされる。

(3) 海南島と西沙群島における調査事例

海南省における考古調査については郝思徳・王大新氏（2003）によって整理されている。まず、1957年広東省文物管理委員会と中山大学歴史系は共同で海南島における分布調査を行い、135ヶ所の遺跡を確認すると同時に、試掘調査も実施している（広東省博物館 1960)。1974～1975年、広東省博物館と海南行政区文化局は西沙群島で分布調査を行い、約30ヶ所の南朝から清代の遺跡と北礁の水下遺跡を確認、甘泉島では唐宋代の居住遺跡の試掘調査を実施している[3)]。同遺跡では、日常雑器の陶磁器類と鉄鍋の口縁部が出土している。1983～1986年、広東省文物管理委員会の指導のもと、第１次分布調査が実施され、古代文化遺存500ヶ所以上を確認した。

海南省が設立した1988年以来、開発に伴う事前調査と『中国文物地図集海南分冊』編集のために、全省に及ぶ分布調査が実施されている。とくに後者では全省19市、県にわたる第２次分布調査で新たに遺跡、遺物散布地約400ヶ所が確認された。また、1996年には中国南海諸島考古項目の一つとして西沙群島の分布調査が実施され、あわせて水中考古学調査によって沈船関連遺物地点８ヶ所が確認され、大量の宋代から清代に到る陶磁器類と銭貨が採集された。1998年にも継続して中国歴史博物館水下考古研究中心、海南省文物考古研究所、広東省文物考古研究所などの共同で構成された西沙水下考古隊は、西沙群島の北礁、華光礁、咸捨嶼と和銀嶼などにおいて水中考古学調査を実施した。

海南島の唐宋代の考古研究は墓葬を中心に調査が実施されている。唐代の墓葬は三亜、陵水一帯に分布し、珊瑚石板墓という地域色豊かな墓葬の他、イスラム教徒の墓葬が多く確認されている[4)]。宋代は三亜、陵水のイスラム教徒の墓葬以外に、北部の海口、瓊山、澄邁などにおいて、塼室墓、石棺墓、土坑墓などの多様な構造をもつ墓葬が確認されている。

また、唐代中後期の珠崖嶺遺跡は版築城壁をもつ城址であり、平面プランは方形を呈し、一辺長さ155～160m、南壁中央に城門が設けられている（第

第５図：海南島と珠崖嶺遺跡

５図)。城壁の残存高さは1.5～2mをはかる。出土遺物は磁器、土器、建築部材の塼と瓦（平瓦、丸瓦、瓦当）の他、生産用具に土製紡錘車と土錘などが出土している（海南省文物考古研究所他 2003)。

３．比較研究の視点

以上、東南中国沿海側における唐宋代の考古学研究を中心に、各地の調査事例として居住遺跡について検討してみたが、ここではこうした考古資料の位置づけを図るための課題を整理しておきたい。

まずは、地域内における遺跡間の関係を如何に捉えるかが問題である。珠海市における各島の分布調査における所見の中で遺跡の継続時間の違いが指摘されている点は重要である。継続性の長い複合遺跡の場合、各時代、時期における空間利用のあり方、居住形態のあり方とその変遷を探る上で注目される。澎湖群島の蒔板頭山期にみられる前後２時期の居住形態、生業形態の変化は重要であり、こうした変化を生み出した歴史的背景についてさらに環東シナ海地域における各地の動向を比較することが重要であろう。ただし、蒔板頭山期の２時期にしても、各々同時期の遺跡間の比較研究も、今後の課題の一つにあげられる[5]。

一方、限定した時期のみの単純遺跡も、当該時期における人々の移動、拡散などを示すことも考えられ、複合遺跡との関わりなどの検討が必要となってくる。また一地域内の居住遺跡以外の遺跡との関わり、とくに埋葬遺跡、生産遺跡との関わりなども今後の課題にあげられる。藤本強氏（2000）は、遺跡を「個々の遺物の出土地点というもっとも小さな位置の情報から積みあげて行く情報と、地理的な単元の情報という大きな状況情報とをつなぐ接点」として位置付けており、各遺跡内における分析と遺跡間の関係という研究の二つの方向性が見出すことが重要である。しかしながら、東南中国沿海側においては各地域とも発掘事例が少ないことから、遺跡の同時代性や遺跡内の

遺構のあり方が把握できない状況にあり、現時点では大まかな帰属年代の中での分布論的な検討しか加えることができない。

ところで筆者は先史時代研究において（後藤 1999）、殷代併行期を中心とした東南中国に広がる斉一性は、華北の殷系文化の南漸と言う外からの影響（外的要因）があったことは否定できないが、内的要因として、珠江三角州を例にすると、特定遺物の広がりに示される地域内でのネットワークの強化も看過できないと考えている。ここでも一地域の設定をどのレベルで行うかが問題であろうが、東南中国沿海側の現時点における唐代前後の考古遺跡の分布と調査状況からすると、東南沿海北部の海壇島・澎湖群島を含む台湾海峡両岸地域、東南沿海南部の珠江三角州地域、海南島などを一つの地域として設定が可能であろう。とくに臧振華氏（2002）は台湾海峡両岸地域について、旧石器時代から歴史時代まで、とくに水中考古学を含む遺跡調査の成果を踏まえて検討を加えている視点も重要である。

これらの地域間の差異として、珠江三角州から海南島の環南シナ海地域に対し、台湾海峡両岸地域の海壇島、澎湖群島では漢代前後の文化遺存の空白が認められる点はこれらの沿海・島嶼地域間の歴史的変動の差異を示しものであり、それは大陸における沿海地域の歴史的変動とも密接な関係を有していたと考えられる。

そして、域外ネットワークと域内ネットワークの関係は、相互に連携するものであると考えられるが、文献記載の有無に関わらず、域内ネットワークの存在は考古学的に遺跡間関係から地道に抽出していくことも必要になってくると考える。

まず、こうした居住遺跡を示す建築部材である瓦類の検討も重要であろう。これは瓦窯との関わりとして、上述の居住遺跡と生産遺跡との関りを直接示す例の一つである。また、出土品の大半を示す出土陶磁器類の検討もこれに関わると同時に、貿易陶磁器の中国国内外における消費のあり方を探る上でも重要である。

そして、今回とりあげた居住遺跡から出土する生産工具である程度広がりをもつ遺物として土錘をあげることができる。沿海地域という地域的特質を鑑みても土錘などの漁撈具による海洋資源の利用に関わる地域間の比較は重要であろう。澎湖群島では各地で円筒形の土錘が一般的であるが、胴部が丸みを帯びるのが形態的な特徴である（第４図１～17）。関口氏が実見した出土資料にも土錘が含まれており（第６図15・16）、土錘の出土量の多さ、瓦の胎土より硬質で、サンゴ粒子や小石粒が多く含まれるものがある点を指摘している。

福建省沿岸の海壇島では海岸近くに立地する集落遺跡の流水遺跡において土錘が採集されている。前述したように円筒形と「井」字形の溝が走るものがある。詳細は不明だが、前者と澎湖群島の土錘に形態的な共通性があるかどうか興味深い。

一方、海南島の唐代の珠崖嶺遺跡では長方形を呈する平面形に中央に１槽（第６図１）、２槽の溝（同図２）が走り、周囲４ヶ所に穿孔をもつものと、管と報告された円筒形（同図３）も出土している。これらの類例を大陸側に求めると、広東新会官水窯址出土品（同図９～14）をあげることができる。なお、海南島では1950年代の調査でも土錘が採集されている（同図４～８）。これらの帰属年代の詳細は不明であるが、報告書では採集土器によって新石器時代から漢代としている。これらの土錘の内、第６図５は珠崖嶺遺跡出土品と類似している。

また前述した香港元朗輞井圍鶴洲嶺遺跡の遺跡でも明末清初の時期の帰属する土錘（同図17）が出土しているが、形態的にはこれまでのものとは異なる。

以上のように東南中国の沿海側の土錘について既知の資料を検討してみると、出土遺跡が少ない状況ではあるが、澎湖群島に分布する定形的な土錘に対し、南シナ海地域においては形態的な多様性が認められる。これは時間差も考慮しなくてはならないが、網漁が実施された場やその対象魚類による差

第6図　出土土錘実測図
（縮尺○内約1/2 以外約1/4）

異がその背景にあったのかもしれない。

その他の生業形態について、農耕技術の比較も重要と考えるが、関連する考古資料が乏しい点は否定できない。

このような唐代以降の考古学研究にあたって、文献資料に記載された歴史現象との対応が問題となってくる。居住遺跡を中心にした場合、そこには東南中国という歴史性を考えると中国国内の人々の移動、移住がうかがえる。

また、それが海を越えて澎湖群島、台湾島や、さらに海南島から南海諸島への広がりをもつことを示している。これに関して、曹永和氏（1988）が台湾史の視点として次のように指摘する点は示唆に富むものである。やや長い引用になるが、「漢民族による台湾の開発、または台湾における漢人社会の形成過程という中国史の枠組」だけではなく、「東アジアというフレーム」、「世界史的契機のなかで」で「国家単位の国際的政治秩序による視角」のみでなく、「国際政治社会形成以前からの、あるいはその基底に横たわる、より原初的な、文字のない時代からの、東アジア諸地域間の人々の交通往来の歴史的推移のなかに生成した東アジア交通圏・交易圏に立ってとらえる」ことの重要性を指摘している。そこに海域世界という重要な問題が浮かびあがってくる。

また曹永和氏（2001）は、台湾の漢人移民は台湾が結節点になってから初めて行われ、ついでにオランダの植民地経営があることを述べながら、「通商ネットワークがあって、農業開発がそのあとに続いてくる」とした。一方で、「商業の始まり、交通路の開拓の前に、漁業が見落とされてはいけない」とした点も重要であろう[6]。

まとめ

「地域」をめぐる考古学研究には、様々なアプローチが可能である。とくに考古学的な遺跡、遺跡群の研究としては、一地域内における遺跡間の関係

を重視しなければならない。その点において、東南中国沿海側に多数存在する島々は、地理的空間の範囲を限定しやすい点において有効であろう。

そして、東南中国について各地域文化の時間的変遷と東南中国における内なる地域間の文化関係、東南中国と外との文化関係を重層的に捉えることが必要である。

本稿でとりあげた東南中国沿海側の島嶼域における考古学の研究テーマとして、島内の関係として遺跡の立地や遺構の分布から導き出される居住形態の変遷、島外の関係として周辺地域、本土との文化関係などをあげることができる。また、歴史的に変動する地域文化を捉える上では、各々の時代背景を十分に考慮することが必要である。

これは、環シナ海全域に共通した課題であり、島嶼域における考古学研究は島内の関係と島外との関係という両側面の視点をもつことによって、今後、環シナ海地域からさらに広がる島嶼域における比較研究が望まれる。

東南中国沿海側における唐宋代以降、陶磁器窯跡や港湾遺跡、沈船などの考古遺跡は環シナ海地域を舞台とした貿易活動に関わるものとして注目されるが、本稿でとりあげたような居住遺跡の比較研究による各島嶼域と大陸部との関係、島嶼域間の関係は、さらに環シナ海地域の交流へと視点を広げる上でその最も基礎にあるネットワークに他ならない。そして、それは日常的な生活文化がその背景になっていることも看過できないと考える。しかしながら、具体的な検討を行うことのできる考古資料は、本稿で検討した諸遺跡においても極めて少ない点は否定できない。また、本稿では具体的に検討することができなかった出土陶磁器類・銭貨の比較研究も合わせて行うことが今後の課題と言える。

註

(1) こうした地域区分について、各地域文化の範囲は離れた地域間であれば、その境界を顕著に捉えることができるかもしれないが、隣接する地域間

の場合、むしろ連続的なものであったと考えられる。これは、先史時代における地域性につながる問題であり、文化の交錯する状況を動態的に捉えるには、各文化要素の空間的な広がりを抽出するばかりでなく、その要素を各地域の文化的脈絡の中で位置付ける必要がある。

(2) 同誌には、張威、林果、呉春明氏による沈船の調査成果と福州港の歴史的関係を検討する論考も含まれている。また、定海の調査報告には他に中澳合作水下考古専業人員培訓班定海調査発掘隊（1992）などがある。

(3) 西沙群島における分布調査に関しては以下の報告文がある。

広東省博物館 1974「広東省西沙群島文物調査簡報」『文物』1974－10，1～29

広東省博物館 1974『西沙文物　中国南海諸島之一西沙群島文物調査』文物出版社

広東省博物館他 1976「広東省西沙群島第二次文物調査簡報」『文物』1976－9，9～27

広東省博物館他 1982「広東省西沙群島北礁発現的古代陶瓷器」『文物資料叢刊』第６輯，151～168

1991年にも王氏による調査が実施されている。

王恒傑 1992「西沙群島的考古調査」『考古』1992－9，769～777

なお、1992年と1995年には南沙群島の分布調査も実施されている。

王恒傑 1997「南沙群島考古調査」『文物』1997－9，64～70

(4) イスラム教徒の墓葬は大陸部の楊州、泉州、広州などにおいても発見されているものであり、当時の海上貿易活動と密接な関係があると考えらている。

(5) 中屯貝塚の採集陶磁器類を検討した関口氏（1983）も、その主たる形成時期が南宋代であることは間違いないとしながらも、１m以上に及ぶ貝層の堆積状況を鑑みて、その前後の時期の陶磁器が含まれる可能性がないか指摘している点は注意しなくてはいけない。

(6) これらの見解は曹永和氏、村井章介氏、濱下武志氏による座談会「東アジア海域のネットワーク」(2001) で示されたものである。

引用・参考文献

王静 2003「海南島的古墓葬」『東南考古研究』第3輯, 243～248

小澤正人・谷豊信・西江清高 1999『中国の考古学』同成社

海南省文物考古研究所他 2003「海南瓊山市珠崖嶺古城址1999年発掘簡報」『考古』2003－4, 24～32

広東省博物館 1960「広東海南島原始文化遺址」『考古学報』1960－2, 121～130

広東省文化庁編 1989『中国文物地図集　広東分冊』

広東省文物考古研究所他 2002「広東新会官沖古窯址」『文物』2002－6, 25～43

呉春明 203『環中国海沈船－古代帆船、船技與船貨』海洋中国與世界叢書 江西高校出版社

後藤雅彦 1999「珠江三角州地域をめぐる先史文化研究」『琉球大学法文学部人間科学科紀要 人間科学』第4号, 61～88

後藤雅彦 2004「澎湖群島における先史文化研究」『琉球大学法文学部人間科学科紀要　人間科学』13, 407～434

珠海市博物館他 1991ａ「珠海海島考古調査」『珠海考古発現與研究』183～205

珠海市博物館他 1991ｂ「珠海唐至清居住遺址及各地発現的陶瓷器」『珠海考古発現與研究』206～226

秦慧穎 2003「福建古代動物神靈崇拝」『東南考古研究』第3輯, 254～270

G. W. スキナー（今井清一訳）1989『中国王朝末期の都市』晃洋書房

関口広次 1983「澎湖群島・中屯貝塚発見の中国陶磁について」『古文化談叢』第12集, 431～444

郝思徳・王大新 2003「海南考古的回顧與展望」『考古』2003－4, 3～11

曹永和 1988「環シナ海域交流史における台湾と日本」『鎖国日本と国際交流』

上巻、611～639、吉川弘文館
曹永和、村井章介、濱下武志 2001「座談会　東アジア海域のネットワーク」『越境するネートワーク　海のアジア 5』259～279，岩波書店
臧振華 1989「澎湖群島拓殖史的考古学研究」『中央研究院第二届国際漢学会論文集　歴史與考古組』87～112
臧振華 2002「台湾海峡水下考古的重要課題」『石璋如院士百歳祝寿論文集　考古・歴史・文化』329～348
中澳合作水下考古専業人員培訓班定海調査発掘隊 1992「中国福建連江定海 1990年調査、発掘報告」『中国歴史博物館館刊』1992－18・19
中澳聯合定海水下考古隊 1999「福建定海沈船遺址1995年度調査与発掘」『東南考古研究』第２輯，186～198
中国社会科学院考古研究所編 1984『新中国的考古発現和研究』（『新中国の考古学』1988）
張威・林果・呉春明 1999「関於福建定海沈船考古的有関問題」『東南考古研究』第２輯，199～207
鄧聰 1994「考古学與香港古代史重建」『當代香港史学研究』305～331，三聯書店（香港）
福州市文物考古隊他 1995「1992 年福建平潭島考古調査新収獲」『考古』1995－7，577～584
藤本強 2000『考古学の方法－調査と分析』東京大学出版会
香港考古学会他 2001「香港元朗輞井圍鶴洲嶺遺址発掘」『広東省文物考古研究所建所十周年文集』359～380
楊耀林 1994「深圳出土瓷器及有関問題的探討」『深圳考古発現與研究』248～253
劉茂 2003「香港深湾唐代窯址性質試析」『東南考古研究』第３輯，271～276
Tsang Cheng-hwa 1992 *Archaeology of Peng-hu Islands Inst.of History and Philology Academia Sinica*